

ロボット革命

松本 康子

我が家の娘たちは、「鉄腕アトム」が夢物語ではなく、ASIMO というロボットに実現化できた時代に生きています。そんな時代を先取りするつもりはなかったのですが、夫の「機械に強くなる子育て」で、子ども達はその恩恵に浴しているようです。

＜ロボット革命とアポロ＞

15 年くらい前の週末は、子どもの日本語教育の一つとして、借りてきた貸しビデオを親子で見るのが常でした。娘たちが大好きだったのは「平成教育委員会」や「世界不思議発見」などのクイズ番組でしたが、時には、私の好みで「歌舞伎」や「映画」、「特集・特番」ものも見せていました。その中の一つに「ロボット革命」というのがありました。

そのロボットは、今はまだ目の動きや階段を上るひざの動きなどが、人間の動きに比べると到底及ばないし、肝心な動力となるバッテリーに至っては、これから問題を解決していかななくてはならない、という内容で締めくくられました。ですが、「鉄腕アトム」がマンガの世界での物語ではなく、現実のものとして登場する日もそう遠くないと思わせる、とても印象的な番組でした。そして、このことが娘たちの未来にどう関わってくるのか、また、なぜロボットが革命的なのか、いろいろ考えてみても答えが出せません。

この番組を見ていて、私が高校生の頃の 40 年前に、アポロ 11 号が月面着陸し、人間が月に第一歩を標したのを思い出しました。雑誌やマンガの上での空想の宇宙へ、実際に人間が飛び出していく様子を、映像を通して実感しました。そんな中で母は、「これ、アメリカ映画じゃないの」と言ったのです。私が時代の流れの中にあることを感じていたとき、宇宙や宇宙飛行士、ロケットなどは、母の日常とはまったくかけ離れた「作り物」のように受け取られていました。

今になって考えてみると、そのときの母の心境が、「ロボット革命」を見てもピンとこなかった私の感覚とよく似ていたのだらうと、理解できます。

＜機械に強い子ども＞

アポロ時代から現在へ、今の機械類は私の子ども時代のものとは格差の感があります。その代表格がロボットなのでしょう。我が家のだんな様は、それらに囲まれた自分の子ども達が、機械類に関しては男性任せ、という女性に育ってほしくなかったようです。

ロボットはさておいても、メディアを通じて、車の生産ラインや医療の現場などで、人間に取って代わる活躍を目にする場面が度々あります。機械が人間と同じように、いやもしかすると、それ以上の仕事をしているのかも知れません。そして、私たちは、その仕組みや構造を知らなくても、いろんな恩恵に浴しています。夫は、娘たちがそれをきちんと理解すれば、自分たちに必要な正しい選択と使用法を身につけられる、という考え方です。だからでしょうか、母親が子どもに箸の持ち方を教えるように、機械に触れさせました。



子ども達が父親と楽しそうに機械いじりをしているのを見ると、夫の「機械に強い娘にしたい」という願望も何となく納得できます。ですが、なぜ買ったばかりのテレビやステレオを、壊されることも覚悟で子どもに触らせるの？私自身の例で考えてみれば、中学校の家庭科でミシンの分解の仕方を習って後は、簡単な故障程度は自分で解決できるようになったのです。だから、言葉で説明すれば理解できる年齢になってからでも遅くはないはずです。